

# 助動詞の伝聞表示に関する通史的考察

山口 堯二

- 一 はじめに
- 二 「へ終止」なり
- 二の一 上代の「へ終止」なり
- 二の二 中古の「へ終止」なり
- 二の三 中世の「へ終止」なり
- 三 「げなり」げな
- 四 「さうな」さうだ
- 五 結び

「へ終止」なり、「げなり」げな、「さうな」さうだ」という三種の助動詞は、いずれも第三者から前もって入手した情報に拠る推定、すなわち、伝聞の表示を交代しながら担ってきた。伝聞の用法は、同じ語のいわゆる推定の用法に比べてつねに後発であり、新しい語との交代も推定の用法から始まっている。また、助動詞別に見れば、時が経つほど伝聞用法が相対的に優勢化し、その表示性が明示化してもいる。伝聞用法は伝聞内容を即推定内容とする、根拠の表示性において、他の推定用法より論理の明示性に優れる。それが後発の理由であるとともに、その優勢化、論理の明示化が、一方ではより含みに富む新語への要望につながっては、他の語と交代してきたのであろう。本稿はそのような通史的解釈を提示するものである。

## 一 はじめに

「伝聞」の語がその用法の説明に用いられる助動詞には、古代語では過去・詠嘆の助動詞「けり」、推量の助動詞「らむ」「けむ」、いわゆる伝聞推定の助動詞「なり」があり、中世以降には「げなり」√「げな」「さうな」√「さうだ」がある。しかし、このうちの「けり」・「らむ」「けむ」と、いわゆる伝聞推定の助動詞「なり」以下とは、そこで用いられる「伝聞」の意味にかなり大きな差がある。

まず、過去の助動詞の一つとされる「けり」について「伝聞」ということが言われるのは、主として助動詞「き」との違いを説明するためである。同じ過去や回想の表示といっても、「き」には直接的な体験を表示する働きがあるが、「けり」は伝承や他から伝聞した事柄について用いられる、というようである。この場合の「伝聞」は、そのように素材的な事柄のありようを「き」のそれと区別する手段の一つになってきただけである。<sup>1)</sup>したがって、いわゆる伝聞推定の「なり」以下における「伝聞」と混同されるおそれは少なからう。

推量の助動詞「らむ」「けむ」にも、たとえば、次のようなものをその例として、他から伝聞したことを表すと説かれることが多い。

(1) 蓬萊といふらむ山に逢ふやと、浪に漕ぎたゞよひあり

きて(竹取)

(2) 大汝少彦名のいましけむ志都の岩屋は幾代経ぬらむ

(万葉・三・三五五)

しかし、このような場合の「伝聞」も、それらの助動詞の表示性にとつては、素材的なありようにとどまると見てよい。<sup>2)</sup>第三者からの伝聞によつて得た情報であろうとなかろうと、「らむ」「けむ」は、それぞれ可能的に想定される現在・過去の事態を表し、ひいてはそのように想定し推量する主体の働きも表すとこそ見るべきであろう。広義の推量の働きには、可能的な想定にとどまる推量と、事実と認定される蓋然性も高い推定とを区別する立場があるが、その立場に立てば、他からの伝聞内容を推定内容とするいわゆる伝聞の表示性は、より客観的な推定の表示性とこそ隣接するものであると見てよいだろう。その意味で、これらの例の「らむ」「けむ」が、それぞれ伝聞を表すというのは、それらの助動詞としての働きより、個々の表現の素材についての解釈を優先させた説明法である。

そこで、本稿では助動詞における伝聞表示の通時的な変遷を、古代語のいわゆる伝聞推定の助動詞「なり」、中世以降の助動詞「げなり」√「げな」「さうな」√「さうだ」という三語を対象を絞って検討することにする。助動詞による伝

聞表示の通史的考察にとつて、対象とすべきはこの三語に限られよう。通史的考察というアプローチ自体、文法史研究にもまだ例は少なく、時代を異にするこの三語をまとめて通史的考察の対象にする試みは、これが最初のものになる。

なお、古代語のいわゆる伝聞推定の助動詞「なり」は、およそ昭和三〇年代から四〇年代にかけて活発な議論が続いた研究対象であつた。その反動であろう。それ以降は古代語の助動詞の中でもとりわけ敬遠されがちなものになり、ここ二〇数年、この語を主としたモノグラフはきわめて限られている。筆者の場合も、他の二語とセットにすることで、やや心理的な困難を和らげ得た点があるだろう。が、そのような本稿の企画にとつても、いわゆる伝聞推定の助動詞「なり」は、最も問題性に富む課題になつた。その意味で、この語をもう一度より身近な議論の対象に引き戻す一助ともなれば幸いである。

さて、結論から言えば、この三語の助動詞にも最初から伝聞を明示できたものはない。どの語もまずより一般的な推定表示の用法をそなえ、その働きの中で、時代の推移とともに伝聞の表示性を高めている。時代の推移につれて他のより新しい助動詞と交代する場合も、まず推定表示の用法から新しい語との交代がはじまるのが、古代語から現代

語に至る変遷に通じて認められる顕著な傾向である。以下、その点を明らかにすべく、各助動詞ごとに、その用法の分布を検討していく。

## 二 「へ終止」なり

いわゆる伝聞推定の助動詞「なり」<sup>3</sup>は、上代には活用語の終止形にのみ接したが、中古にはラ変・ラ変型活用語については連体形承接に転じた。しかし、その点を除けば、中古においても終止形に接することを、指定（断定ともいう）の助動詞「なり」とは異なる特徴としている。指定の「なり」は、上接語が活用語の場合、連体形にしか付かないからである。その特徴によつて、以下、先学の処置に準じ、いわゆる伝聞推定の助動詞「なり」を、「へ終止」なりと呼ぶ。

さて、その「へ終止」なりについて、「伝聞推定を表す」などと説明されてきたその「伝聞」という用語には、後世の活用語連体形承接の「げなり／げな」「さうな／さうだ」などにめだつてくる意味での「伝聞」とは異なる使い方も少なくない。よつて、通時態を論じる本稿の立場からは、「伝聞」や「推定」という基本的な概念について、可能な限り通時的使用に耐えるように、まず限定してかかる必要がある。本稿ではその用意も含めて、「へ終止」な

り」の表示する推定は、次の三種に大別して捉えることにしよう。

(a) 聞こえている物音・話声の発生源についての、聴覚による直観的な推定。

(b) 現に提供されている現象の背後の状況についての、論理的な推定。

(c) 第三者からあらかじめ入手した情報内容に即しての論理的な推定、すなわち伝聞。

以下、それぞれの特徴によって、(a)を音源推定、(b)を状況推定、(c)を伝聞と、それぞれ呼び分けることにしよう。

(a)と(b)とは併せて推定と総称することもできる。

この(a)(b)(c)のうち、最も一般的に推定と呼べるのは(b)である。(a)の音源推定と、(c)の伝聞とは、むしろ特殊性を有する広義の推定と言えよう。そこで、これらの観点による例の区別に当たっても、(a)(c)についてはそれぞれ音源推定・伝聞の表示と見うることをもってその例にしようと思う。本稿全体としては伝聞の用法が主たる関心事になるが、その伝聞の用法についても、そのように見うる例の分布とその時代的推移を見ていくことこそ、漸進的に推移したはずの現象への通史的解釈には有効であろうと考えるからである。通時態の研究法としては、たんにそう見うるだけの例より、そうとしか見られない(と研究者が判断する)例

を問題にする態度のほうが一般的であることは承知している。しかし、漸進的に推移する現象の場合(言語現象はほとんどそうであろう)、そのみによる判断はかえって一部の偶然的事実のみを重く見がちになるのではないかと考えるからである。

「〈終止〉なり」の用法にも、時代による変化が顕著である。以下、上代・中古・中世について、それぞれの表示性の用法を例示しながら、時代ごとの用法の分布、およびその内部に認められる特徴などを概観する。

## 二の一 上代の「〈終止〉なり」

上代における「〈終止〉なり」は、たとえば次のように音源推定の用法を中心に用いられている。

(3) 「己が夢に云はく、天照大神・高木の神の二柱の神の命もちて、建御雷神を召して詔らししく、『葦原のうつ国は、いたくさやぎてありなり(阿理那理)。あが御子等、不平やぐさみますらすし。……』とのらしき。……」

(古事記・中)

・我のみや夜舟は漕ぐと思へれば沖辺の方に梶の音なすなり(須奈里)(万葉・十五・三六二四)

次に、状況推定の用法の例は、上代にはまだごく限られている。そのよい例になる次の歌は、大伴坂上郎女作なので、

一応万葉第三期をもつてその用法の発生時期と見なそう。

(4)汝をと我を人ぞ離<sup>さ</sup>くなる(離奈流) いで我が君人の中<sup>なか</sup>言聞<sup>こと</sup>きこすなゆめ(万葉・四・六六〇)

この歌は人の噂に言及したものであるが、噂として入手した情報内容に即しての伝聞を表示した例ではない。この例にも、「ナリはそのように聞こえてくることを表わす助動詞。ここは伝聞として用いたもので、人の噂していることをいう。」(日本古典文学全集本頭注)のように、「伝聞」の語を用いて説明している注もあるが、本稿にいう伝聞とは意味が異なる。「第三者からあらかじめ入手した情報内容に即しての論理的な推定」という意味での伝聞を表示した例は、上代には見出せない。

上代の「終止」の分布については、松尾捨治郎に次のような指摘がある。

万葉集中の動詞の下<sup>した</sup>のなりは、終止の下といふことの明かな者、及び終止の下か連体の下か不明な者を通じて、五十八例ある中、五十二例は悉く音響に関する者であつて、残る六例も音響に關すると認め得る者、或は人の言を聞くについての者であつて、明かに連体の下に付いて、所謂指定と認むべき者は絶無である。

(助動詞の研究)

これを言い換えれば、上代の「終止」なり」は、「音

響」を聞くという事柄に直結した音源推定の用法に著しく偏っていることである。状況推定の用法らしく見える例が、きわめて限られていることはすでに述べたが、状況推定の用法に相当する働きには、「らし」を用いるのが上代では普通であつた。「終止」なり」と「らし」との働きの差は、その両者が文脈上近接する次の例によつても、容易にうかがうことができる。

(5)秋田刈る苦手<sup>くるみ</sup>動くなり(播奈利) 白露し置く穗田なしと告げに來<sup>き</sup>ぬらし(来良思) へ一に云ふ、「告げに來<sup>く</sup>らしも(来良思母)」(万葉・十・二一七六)

前掲(3)の第一例中にも、「あが御子等、不平みますらし(良志)」と、同様に「らし」が近接して用いられていた。なお、「終止」なり」の成立については、上代の「終止形十見ゆ」と関連させる説があるが、ここでは立ち入らないことにする。

## 二の二 中古の「終止」なり」

音源推定の用法は、中古においても引き続き顯著である。たとえば次のような例がそれである。

(6)秋の野に人待つ虫の声なり我かとゆきていざとぶらはん(古今・秋上)

・暮うちはてつるにやあらむ、うちそよめく心ちして、

人々あかるくけはひなどす也。「わが君はいづくにおはしますならむ。この御格子はさしてん」とて、鳴らすなり。「しづまりぬなり。入りにて、さらばたばかれ」との給。(源氏・空蟬)

状況推定の用法と見られる例も、この時代には多く認められる。『源氏物語』(以下『源氏』と略称)の例で調べてみると、その例には、会話の場で相手の発言を踏まえながら用いられている例が多い。次にその一斑を示す。

(7)「……もし我に後れて、その心ざし遂げず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね」と、常に遺言しておきてはべるなる」と聞こゆれば、君もをかしと聞きたまふ。人々、「海竜王の后になるべきいつきむすめな」り、「心高き苦しや」とて笑ふ。(源氏・若紫)

・「何」と言ふぞ。おいらかに死にたまひね。まろも死なむ。見れば憎し、聞けば愛敬なし、見棄てて死なむはうしろめたし」とのたまふに、いとをかしきさまのみまされば、こまやかに笑ひて、「近くてこそ見たまはざらめ、よそにはなか聞きたまはざらむ。さても契り深かなる瀬を知らせむの御心ななり。にはかにうちつづくべかなる冥途の急ぎは、さこそは契りきこえしか」と、いとつれなく言ひて、(源氏・夕霧)

第一例は、「へ終止」なり」の伝聞用法(傍点部)を用い

て良清が源氏に話す伝聞内容中の明石の入道の詞「この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね」をうけた、他の供人の発言。第二例は雲井雁が夕霧に向かって「おいらかに死にたまひね。まろも死なむ」などと言ったのをうけた夕霧の発言である。『源氏』における状況推定の例には、このように相手の発言を踏まえた会話文の例が多い。後に第Ⅰ表に示すが、『源氏』の第一部とされる桐壺の巻から藤裏葉の巻までの「へ終止」なり」について用法別の分布を調べてみると、状況推定の例が二九例あったが、そのうち、一九例までが会話文であり、それに準ずる点のある噂・報告・消息・心中などの文の例がさらに七例あって、地の文の例はわずかに三例にとどまる。

ところで、その会話文中の例には、次のように相手の発言内容をちよつと言ひ換えているだけで、論理的な推定というほどの働きまでは認めにくい例もまじっている。

(8)同じ小柴なれど、うるはしうしわたして、きよげなる屋、廊などつゞけて、木立いとよしあるは、「何びとの住むにか」と問ひ給へば、御供なる人、「これなんながし僧都の二年籠り侍るかに侍るなる」。「心恥づかしき人住むなる所にこそあなれ。あやしうもあまりやつしけるかな。きゝもこそすれ」などのたまふ。

(源氏・若紫)

傍点を付した供人の源氏に対する詞の中の「なる」は、伝聞の用法の例と見てよいが、それに応じた源氏の詞の二例には、その供人の発言に応じて、いわばその事柄自体の広義における被推定的なありようを示す意味ぐらいいしか認めがたい。「なにがし僧都」を「心恥づかしき人」と言い換えている程度の主体性は認められるにせよ、この源氏の詞の内容は源氏自身の思考による新たな状況の推定というほどではない。この二例の「〈終止〉なり」には、話し手自身による状況推定を示す以上に、「〈終止〉なり」を用いた相手の発言に應じて、その事柄自体の被推定的なありようを示す意味あいのほうがむしろめだつのである。

そう言えば、音源推定を表示する用法も、それこそ「推定」という話し手のムードを思わせる用語が不似合いとも言えるほど、物音や人声がどう耳に聞こえるかというその事柄のありように、むしろ重点を置くものである。音源推定の用法に比べれば、状況推定の用法は、全体としては話し手のムード的な推定の働きをより担いやすい用法である。しかし、松尾捨治郎は、「奈良朝に遡れば、其の伝聞の原義は、音響を聞くことに存する」と述べたが、その「伝聞の原義」はむしろ状況推定の原義であろう。『源氏』における状況推定の例に、会話の相手の発言を踏まえたものが多いのも、相手の発言を聞きながら会話が進行することに

おける聴覚への依存性において、その両用法の連続性がなお濃く保たれていたせいではないか。

その意味で、状況推定の表示にも、(8)の例などをその端的なありようとして、事柄自体の被推定的なありようを示す働きも、音源推定の場合に次いで認めなければなるまい。古代語においては、狭義の推量の助動詞にも、事柄自体のありようを示す働きがムード表示の働きと相対的に強く融合していたから、それよりも客観性のまさる推定の働きを担う助動詞に、その事柄自体のありようを示す働きがめだつのは、むしろ当然と言つてよい。

なお、この時代には助動詞「めり」も推定の働きを担っており、「〈終止〉なり」の状況推定の用法の、すでに述べた会話文への偏りには、それとの相対関係も大きく関与しているであろう。助動詞「めり」は視覚による推定を特徴としたが、それに対して、「〈終止〉なり」に音源推定の用法があり、しかも、それが「原義」らしく思える時代的な分布は、助動詞「めり」と「〈終止〉なり」とが、少なくとも中古においては、きわめて相補的な関係にあったことを思わせる。

中古には、第三者からあらかじめ入手した情報内容に即しての論理的な推定、すなわち、伝聞の用法と見うる例も多い。それをその情報の入手方法から見れば、次のように

個人の報告・世評・噂などによるもの(9)も、古典的な知識によるもの(10)もある。

(9) 「……いまは帰るべきになりければ、この月の十五日に、かのもと国より、迎へに人々まうでこんず。

……」「……」「この十五日に、月都より、かぐや姫の迎へにまうでくなる。……」（竹取）

・うちつぎては、仏の御中には初瀬なむ、ひのものとうちにはあらたなるしるしあらはし給と、もろこしにだにきこえあむなり。(源氏・玉鬘)

・又きけば、侍従の大納言の御むすめ、なくなり給ひぬ  
なり。（更級）

(10) 「……女は三に従ふものにこそあれど、ついでは違へて、をのが心に任せんことはあるまじきことなり」

との給。  
(源氏・藤袴)

『源氏』の第一部とされる桐壺の巻から藤裏葉の巻までについて、以上の音源推定・状況推定・伝聞の各用法の例数と、その使用文脈の分布を、筆者なりの判断によって調べてみると、第Ⅰ表に示すようになった。

この表で見ると、伝聞の例も、状況推定のそれと同様に、会話文における使用がめだち、そこに状況推定の用法との関連性もどうか見えそうである。音源推定と状況推定との関係については、後者の会話文への偏りを根拠として、聴覚

第Ⅰ表 『源氏』第一部の「終止」の用法別使用文脈

計	地の文	報告・噂・手紙・心中	会話文	文脈 / 用法
(二五・四二) 一三六%	一七	〇	四	音源推定
(二二・三二) 二九	三	七	一九	状況推定
(六三・三二) 八六	九	一七	六〇	伝聞
	二九	二四	八三	計

への依存性にその連続性が認められることを述べたが、音源推定の用法では、その事柄自体の音響性が「〔終止〕」を使用する十分条件になる。音源推定の用法だけ、地の文中の例がもつとも多いのも、その意味で会話の場合への依存性がないことによるだろう。

二の三 中世の「終止」なり

中世における「終止」の用法を概観すると、まず院政・鎌倉期には、音源推定の用法と見うる、次のような例がある。

(11) 既ニ過テ行ヌト聞ツル者共、即チ返来テ物云ヒ騒グナ  
ルヲ聞ケバ、人ノ音ニ似タリトヘドモ、□二人ニハ非  
ヌ音ヲ以テ云ク、(今昔・二四・一三)

・不動の咒となへてゐたるに、夜中斗にやなりぬらんと  
思ふほどに、人々の声あまたして来る音す也。(宇



## 治拾遺・一七

しかし、後述する『覚一本平家物語』（『覚一本平家』と略称）などには、こういう例も見られなくなるので、音源推定の用法は、とりあえず鎌倉初期頃まで続いた用法と見ておくことにする。

状況推定の用法には、たとえば、次のような例がある。

(12) 聖、「たゞ今はなん時ぞ」といふ。ともなる僧ども、

「申のくだりになり候にたり」といふ。「往生の刻限にはまだしかななるは。いますこし暮せ」といふ。

（宇治拾遺・一三三）

しかし、中世鎌倉期の状況推定の用法には、次のような形の例が次第にめだってくる。

(13) 利仁、うち笑ひて、「物の心みんな思ひてしたりつる事を、誠にまうで来て、つげて待るにこそあなれ」といへば、（宇治拾遺・一八）

・何事のあるべきとおもひあなづつて、平家の人共が、さやうのしれ事をいふにこそあなれ。（覚一本平家・四・競）

これらの例の「へ終止」なり」は、その上接部（傍点部）とともに「にこそあなれ」の形ですでに一体化が進んでいることに注意しなければならない。なぜなら、このころにはその一体化による次のような縮約形も多く用いら

れているからである。

(14) 「よし／＼、をのれらは内府が命をば重うして、入道が仰をばかうしけるござんなれ。其上は力及ばず」

（覚一本平家・二・小教訓）

・「いや児こそ勝るよ。法師は物にてもなきぞ。早弱りて見ゆるぞ」と申ければ、弁慶これを聞て、「さては早我は下になるござんなれ」とて、心細く思ひける。

（義経記・三）

この縮約形の「ござんなれ」は、そのまとまりを一語として、もう「へ終止」なり」とは別の語と見ることが可能になる。『覚一本平家』では、状況推定の用法と見てよい例が九例あるうち、五例までがこの縮約形「ござんなれ」に至るもとの形であり、それ以外はいえ、他の推定の助動詞と共に起した、次のような「べかんなり」三例、「まじかんなり」一例を数えるに過ぎなくなっている。

(15) 「何條其御所ならでは、いづくへかわたらせ給べかんなる。其儀ならば武士どもまいつてさがし奉れ」とぞの給ひける。（覚一本平家・四・若宮出家）

・去年讃岐院の御追号、宇治の悪左府の贈官有しか共、世間はなをしづかならず。凡是にも限るまじかむなり。（覚一本平家・三・行隆之沙汰）

このような分布から見れば、『覚一本平家』の「へ終止」

なり」には、状況推定の表示を担うと見うる例はあるにせよ、共起する上接語との癒着・熟合化の傾向がすでに高まつており、「〔終止〕なり」だけで状況推定の働きを単独に担う力は衰退していると言つてよからう。後述するように伝聞の用法には、この時期にもなお他の語と癒着することなく、「〔終止〕なり」が単独でかなり用いられているのであり、それに照らしても、『覚一本平家』における状況推定の用法には衰退がめだつ。そこから憶測し概言すれば、「〔終止〕なり」の状況推定の用法は、これも鎌倉中期頃を境に衰退したと考えて、大きな誤差はないだろう。

「〔終止〕なり」の用法における、このような状況推定の衰退は、とりもなおさずその用法の伝聞への偏りを意味する。第三者からあらかじめ入手した情報内容に即しての論理的な推定、すなわち、伝聞を表示する例を、まず鎌倉期の例で示そう。その情報の入手方法から見れば、ここでも個人の報告・世評・噂などによるもの(16)も、古典的な知識によるもの(17)も、次のようにある。

(16) 京中の上下、「祇王こそ入道殿よりいとま給はつて出たんなれ。誘見参してあそばむ」とて、(覚一本平家・一・祇王)

・「兵衛佐頼朝既に謀叛をおこし、東八ヶ国をうちしたがつて、東海道よりのぼり、平家をおひおとさんとす

なり。……」(覚一本平家・六・廻文)

・なによりも、聖教のをしへをもしらず、また浄土宗のまことのそこをもしらずして、不可思議の放逸無慚のもののどものなかに、悪はおもふさまにふるまふべし、とおほせられさふらふなるこそ、かへすくあるべくもさふらはず。(親鸞消息)

(17) 年比頼たてまつる弥陀の本願をつよく信じて、隙なく名号をとなへ奉るべし。声を尋てむかへ給ふなる聖王の来迎にてましませば、などかいんぜうなかるべき。

(覚一本平家・一・祇王)

・日数ふれば、岩田河にもかゝり給ひけり。「この河のながれを一度もわたるものは、悪業煩惱無始の罪障きゆなる物を」と、たのもしうぞおぼしける。(覚一本平家・十・熊野参詣)

次に、室町初期の成立と見られる『太平記』の「〔終止〕なり」について概観しよう。『元和整版本太平記』(以下『元和本太平記』と呼ぶ)の巻十四までの範囲で調べてみたところ、明らかな終止形に付いた例は認められなかった。しかし、文脈や上接語の形から判断して、次のように伝聞の用法らしい例は、なお一〇例を数えることができた。

(18) 汝等に大塔宮の御坐所を尋問ん為に、召取つる也。命惜くば、案内者して、此方の使をつれて、宮の御座あ

んなる所へ参れ。(元和本太平記・七・3)

・誠に候哉覧、足利殿こそ御台君達まで、皆引具し進せて、御上洛候なれ。(元和本太平記・九・1)

この『元和本太平記』より成立がさらに新しいかと思われる作品からも、次のようにそれらしい例が拾えはしたが、室町期におけるその例は極めて稀になっている。

(19) この山に棲むなる狐狼野干の物が、おぼぢやむばを食物にせんためか。さらずは、今夜は雪けしからず降り積みたれば、雪女といふ物か。(幸若・伏見常葉)

室町期における「げなり▽げな」の多用化については後述するが、室町期における「へ終止」なり」のこのような傾向を、それと総合して考えれば、「へ終止」なり」はその伝聞の用法についても、鎌倉末期には口頭語から衰退して、「げなり▽げな」と交代したのではないかという憶測が可能になりそうである。

### 三 「げなり▽げな」

次に、中世になって推定の助動詞に転じる「げなり▽げな」を取り上げる。その「げ」は、中古においては形容詞(形容詞型活用)の助動詞・形容動詞の語幹、動詞連用形、名詞などに付いて、形容動詞語幹をつくる接尾語であったが、活用語尾「なり」とともに機能性を高めて、活用語の

連体形に広く付く助動詞に転じたものである。「げな」はその「げなり」の連体形「げなる」が、中世における終止形同化によって終止形並みになり、そこからさらに語尾「る」が脱落したものであって、ほぼ室町期以降の形と考えられる。

助動詞としての認定については、その種々の承接法のうち、連体形に付くものに限ってそう認めているものと、形容詞語幹や名詞に付く形にも認めているものがある。<sup>(9)</sup>「げなり」が「げなる▽げな」と転じながら活用語の連体形にも広く付くようになったのは、形容詞語幹などに付く旧来の承接のもとに、助動詞的な機能性を高めた結果であるから、その連体形承接以外の承接法においても、中世のそれには中古語におけるいわゆる形容動詞の語尾的部分よりは、ムード形式寄りの用法の広がりも生じていたと考えよう。

承接法は旧来と同じでも、たとえば次の例(20)のように、終止法や述語の用法に用いられた例には、中世鎌倉期以降、概して推定の助動詞寄りに理解しやすいものがめだつ。

(20) 是楽拍子、忠拍子トモニ、曳物ニ用イゲニ侍バ、イツレニテモ人ノセムカタニシタガウベシ。(教訓抄・六)

・おんなどもがあそびにこなたへ参たげにござる程に、もどれといふてくだされひ(虎明本狂言・乞蟬)

・出居にまします上臈は、世の常の人にてはなげなぞなふ。(幸若・伏見常葉)

後述する室町中期ごろ以降の「さうな√さうだ」は、活用語連体形に付く用法の母体になった形容詞語幹などに付く承接法においても、一般に助動詞としての扱いを受けている。それを考え合わせれば、中世における「げなり√げな」も、終止法や述語的用法の例には、旧来の承接法にかかわらず、助動詞として扱える点があるだろう。接尾語からの助動詞化の時期はあまり明確にしがたいが、一応鎌倉初期と考えておく。

活用語連体形に広く付く「げなり√げな」の承接法は、こうした旧来の承接法から発展的に形成されたものであるが、用法としてはまず状況の推定に用いられはじめたものと見てよい。その比較的早い例には次のようなものがある。

(21) 高声は大仏をおがみ、念ずるは仏のかずへもなど申げに候。いづれも往生の業にて候べく候。(法然消息)

・次ニハ、多氏之中ニモ、ヲヤ祖父等モセザリシ事ドモスル輩モ待ゲナリ。コレヲバ物ヲコノムトイヒナガラ、ヨシナキ事也。(教訓抄・五)

・御内の雑色二人も何事もあらば一しよにて候と申候あひだ、とゞまるげに候。(義経記・五)

・イツモ定テ制詔御史ト云バ、御史ガ詔書ヲウケタマハ

リテ施行スルモノヂヤゲナゾ。(史記抄・孝武本紀・八26ウ)

・単父人ニ呂公ト云者ガ沛令ノ所ニ牢人シテ居タゾ。是ガシカルベイ者デアツタゲナ。沛中ノ豪傑ノ吏ドモガ令ニ重客アルト聞テ皆礼ニユク(蒙求抄・魯褒錢神・二76オ)

このうち、第一、二例は上接動詞の語尾無表記のため、連体形承接という確認はできないが、その可能性を認めて例示した。

先述の「終止√なり」については、その音源推定と区別するため、状況推定の呼称を用いたが、「げなり√げな」には、音源推定の用法を区別する必要は認められない。よって、「終止√なり」の状況推定に当たる用法も、以下に推定と呼ぶことにしよう。

また、「終止√なり」には「めり」との相補的な関係が認められたが、「げなり√げな」の推定用法は、少なくともその両者を含めた形式の表示性に相当するだろう。たとえば次の例(22)のように、文脈上「終止√なり」に相当しそうな例も、(23)のように「めり」に相当しそうな例もあるからである。

(22) 今朝の嵐は嵐ではなげに候よの 大井川の川の瀬の音ぢやげに候よなう(閑吟集)

・目ニモ不見シテアル水ガ流ル、ゲデ、声ガスルゾ。曉ニナレバ水声モサヘテ一倍高クキコユルゾ。(四河入海・一・一53ウ)

・門の辺に、女の声として、尊き音の聞ゆるは、宵に宿借り給ふ上臈の、未だ帰りかねてましますげなぞ。

(幸若・伏見常葉)

(23) サテヨク実ガナラウズゲデ今年ハ花ガ多クツイタゾ。

(四河入海・六・一31オ)

・いそぐ程に、是が六道で御ぎあるげな、みればみちがあまたある程に、しばらくやすんで、極楽のかたへまいらばやと存る(虎明本狂言・八尾)

このような「げなり√げな」にも、その推定の用法にさほど後れることなく、伝聞の用法が現れている。その早い例には次のようなものがある。

(24) 栗沢、何事やらん、のづみと申山寺に不断念仏始め候はむずるに、何とやらんせんし申ことの候べきとかや申げに候。(惠信尼消息・文永五・三・一二)

・鎌倉にも御勘氣の時、千が九百九十九人は随心候人人も、今世間やはらぎ候が故に、悔たる人人候と申げに候へども、此は其には似るべくもなく、(日蓮消息・文永一二・二・一六)

・雷シタ、カニナリ候。人ヲモ取候ツルゲニ候。(祇園

執行日記・天文二・四・一三)

・きけば夏かやをもつらひでねさするげなが、そのやうなどうよくな事するものか、いそひでつらせひ(虎明本狂言・清水)

『祇園執行日記』には連体形承接の「げな」が一三例あるが、いずれも伝聞と取れる例である。『虎明本狂言集』にはそれが一〇例あるが、そのうち、伝聞は七例、推定が三例で、僅かながら伝聞の例のほうが多くなっている。このように室町期にも伝聞の用法に偏る文献があるわけであるが、この時期における推定と伝聞との比率には、文献毎の差が著しいため、いつ頃から伝聞のほうが多くなるといった見通しはこの時期には立てにくい。

ただ、先述の「へ終止」なりの伝聞の用法の存続期間ともにらみ合わせて、助動詞による表示法としては、伝聞の用法についても、鎌倉末期には「げなり√げな」に交代して行つた可能性が考えられる。

近世に入ると、活用語連体形承接の「げな」は、管見に入る限り、すでに伝聞の用法にこそ多用されるようになっていた。<sup>(25)</sup>近世前期の比較的明らかな例には、たとえば次のようなものがある。いずれも事柄が伝聞内容であることを示す他の形式と共に起しているが、近世にはこのような例も容易に拾えるようになっていた。その注意してよい共起形

式に傍点を付して示す。

(5)聞けばむらさきどのとは三年とやらの馴染ぢやげな。

(仮・難波鉦・一)

・女郎もあわれみ、実から話す気になつていましたげなれども、この男の風情尋常すさまじき様子とて、轡がかわしませんでしたと。(仮・難波鉦・五)

・わしが客様の話じやが。踏まれて死なんしたげなと言ふもあり。(浄・曾根崎心中・中)

・関の小まんも草紙に有る絵で見たよりはよい女房。きけば踊りが上手じやげな。(浄・丹波与作待夜の小室節・下)

・どふも了簡のならぬ事が有。聞ばお染殿は山家屋とやらから頼が取て有げな(伎・心中鬼門角・上)

ここで近世前期における「げな」の推定の用法と伝聞の用法の例の分布を少し探ってみた結果を述べよう。(5)の第一・二例の出典『難波鉦』(延宝八年刊)は、大阪新町の廊の遊女評判記であるが、その用例を数えてみると、推定の例が二例に対して、伝聞の例は三一例に及ぶ。この伝聞表示の圧倒的な多さは、評判記という作品の性質にもよろう。しかし、さらに近松門左衛門の浄瑠璃から、『曾根崎心中』『卯月紅葉』『堀川波鼓』『心中重井筒』『丹波与作待夜の小室節』『冥途の飛脚』の六点を選んで、その中の用

例数も調べてみたが、これも推定の例が四例に対して、伝聞の例は一二例あつて、やはり伝聞表示のほうが多くなっている。後述する「さうなVさうだ」が、すでにこの時期、推定の表示には「げな」よりも優勢になつてきているので、その関係からもその分布のありようは納得できるものである。「げな」による推定表示は近世前期を通じて次第に後退しそれが伝聞用法のみを残存させることになつて、「げな」における伝聞の表示性は次第に明示化していったと考えてよからう。

およそ享保ごろを境として、近世後期になると、「げな」の用法はほぼ伝聞の用法に限られてくるようである。次にそういう時期以降の「げな」の例の一斑を示す。

(26)幸此頃承はれば。法性坊の阿闍梨様。下嵯峨へ来てぢやげな。(浄・菅原伝授手習鑑・四)

・ほうくくでうはさをきくに。此間の川原のけんくは。

ころしては。わがみのきやくの伝兵衛殿なれど。大おんうけた久八といふものが。かはりにとられていたげなが。(浄・近頃河原達引・中)

・あれは天の美録と申て、天とは天と読で天の為にうまいたべものだといふのだけな。(滑・酩酊氣質・下)

・なんでも、怪しいから、海賊ではあるまいかと、様子を聞けば女の事じやげな。(伎・与話情浮名横櫛・三)

以上のように、助動詞「げなり／＼げな」も、まずは推定の助動詞として鎌倉期に形成され、室町期には一般化してやがて伝聞の表示にも用いられるようになり、近世に入る頃、伝聞用法のほうが中心になって、近世後期にはそれに偏るようになった。近世後期の「げな」には伝聞の表示性が明示化し、ほぼ伝聞の助動詞と呼んで差し支えないほどになっていたであろう。

#### 四 「さうな／＼さうだ」

「さうな」は、形式名詞（一説、接尾語）の「さう」に「なり」の付いた「さうなり」の一語化したものである。「さうな」をこの助動詞成立時の基本形とするのは、「げな」の形と同様、連体形の終止形同化とその語尾「る」の脱落による。しかし、近世後期の江戸語以降、この語終止形は「さうだ」になって、現代語まで継承されている。本稿ではそうした基本形の推移も併せて、全体に通じる見出し語を示すため、「さうな／＼さうだ」と記すことにする。先述の「げな」が推定の表示に多用された室町期には、「さうな」の活用語連体形に付く承接法はまだ少なく、多くは形容詞（形容詞型活用の助動詞）・形容動詞の語幹、動詞連用形、名詞などの諸形式に付く次のような承接法で用いられている。

(27) ……ト誂デヨサウナレドモ、サモナイゾ。(史記抄・秦始皇本紀・四68才)

・花タチ花デハナササウナゾ。(四河入海・一〇・三16ウ)

・坐限ニ立テ、置カントスレバ鶴ガ難デイヤサウナ色ケシキガ有ゾ(四河入海・一三・三13才)

(28) 欧モ處士ノ方デアリサウナゾ。頼上ニ隠居シテアル故ニ云イサウナゾ。(蒙求抄・胡昭投簪・四37ウ)

・アサヒノデウトシテ、チツト光ノサシサウニホノアカイヲ云ゾ。(玉塵抄・二)

(29) 角ハ四方ノ隈ゾ。其角カラ吹風ヲミテ占ラスルゾ。：

風デ占フゾ。角ハ吹物サウナガサハナイゾ。(蒙求抄・元礼模楷・二71ウ)

・逾月トアル程ニ一年後ノコトデハナサウナゾ。一月二日後ノ事サウナゾ。(四河入海・八・一15ウ)

・三私云此北村盧ト云ヲ天下白ニモ一抄ニモハナタチ花トセラレタガ我ラガ心ナラバ枇杷サウナゾ(四河入海・一〇・三16ウ)

このうち、(27)の第二・三例や、(28)のような承接法は現代語にもあるが、(29)の類の名詞に付く承接法も、近世中期ごろまでは見られる。少なくとも近世前期には(29)の類の承接法もお一般的であっただろう。近世におけるその例には

たとえば次のようなものがある。

(30)それは舞をまい、歌をうたひ、上がたにはやる舞子のやうな物さうな。此くるわにも舞をまふがあるかしらね共、ちと白拍子といふとは、違ふた。ことに銭かねで売り買は無いことさうな。(仮・難波鉦・四)

・「あれへ大名一頭瓜核顔の旦那殿、東寺から出た人そふな」(浄・丹波与作待夜の小屋節・中)

・お前もお侍の果そふなが。武士は相身互。(浄・仮名手本忠臣蔵・五)

さて、これらの承接法に対して、「さうな」の活用語連体形に付く用法の比較的早い例には、次のようなものがある。

(31)さめぐと泣く涙、宇都宮顔にかゝりければ、時雨がすると心得、「やれやれ雨が降るそふな、子ども苦ふけ」といひもあへず、(伽・猿源氏草紙)

・あらたまりた事をいわんす。最早秋風がたちましたそうな。いかにも乗代たい時は其様にいわずと、誰になりと会わさんせや。(仮・難波鉦・四)

「さうな」のこのような承接法における活用語連体形は、現代語の共時態では終止形と呼ばれるようになるから、現代語を含む通時論の観点から、以下その点との折り合いを付けて、「さうな√さうだ」が付く活用形としての連体形

は、終止連体形と呼ぼう。

「さうな」には(7)~(30)のような承接法が先行し、例(31)のような終止連体形に付く承接法は後れて生じたが、その両者の関連を窺おうと、『難波鉦』について「さうな」の承接・用法の分布を少し探ってみた。その結果は、次の第II表のようになった。表中の上接語の区別における「形容語幹類」は、形容詞(形容詞型活用)の助動詞)の語幹類、「終止連体形」は活用語の終止連体形、のそれぞれ略称である。

第II表 「難波鉦」における「さうな」の分布

活用形等	上接語					
	形容語幹類	動詞連用形	名詞	終止連体形	計	
さうに・さうで	三	一	二	六	一二	
さうな〈終止法〉	一	〇	一〇	一五	二六	
さうな十接続助詞	〇	〇	一	二	三	
さうな〈連体法〉	二	九	〇	〇	一一	
さうなれ十ども	一	〇	〇	〇	一	
計	七	一〇	一三	二三	五三	

この表を見てすぐ気づくのは、名詞に付く「さうな」に、終止法の多いことであり、また、その偏りを意味することく、連体法の例がない(乏しい)ことである。

名詞に付く「さうな」の例は、近松の浄瑠璃作品にも、



先に選んだ六点のうち、『卯月紅葉』『堀川波鼓』『心中重井筒』『丹波与作待夜の小室節』にそれぞれ一例ずつ、計四例見られるが、(30)の第二例のようにいずれも終止法の例であった。

このように名詞に付く承接法の「さうな」が、何よりも終止法に集中していることは、その「さうな」の活用形の相対的な広がりも含めて、むしろ活用語の終止連体形に付く承接法のそれと共通している。それはこの承接法の「さうな」が、その推定の働きにおいても、活用語の終止連体形に付く「さうな」に近いことを暗示するように見える。

形容詞（形容詞型活用助動詞）の語幹類や、動詞連用形に付く承接法は現代語の「さうだ」まで継承されて、一般にこれも助動詞として扱われ、様態を表すと説明されることが多い。名詞に付く承接法の「さうな」も、承接法の上からはそれに含めて考えられがちであるが、右の分布から言えば、むしろ活用語の終止連体形に付く承接法と一つ括って推定を表すと見るほうがよさそうに見える。

活用語の終止連体形に接する「さうな」の推定用法の早い例は(31)にあげたが、なお近世におけるその後の例も少しまとめて示そう。

(32) 涙の雨の横時雨、袖に余りて窓を打つ。「ハア、降ってきたそふな」と西受けの竹櫺子。反古障子を細目に

明けて見やる野風の畠道。(浄・冥途の飛脚・下)

・ナ申。コレ申く。是はしたり寝てござるそふな。コレサ平右衛門。あつたら口に風ひかすまい。(浄・仮名手本忠臣蔵・七)

・なぜおれを見て、見ない顔をしていくしらん。成ほど成ほど。ゆふべおらが所へ来るはずで、こないによつて、それで見ない顔したそふな(酒・遊子方言)  
・そりやアいゝがたいそふ<sup>けむ</sup>煙る。出前でも沢山<sup>たんや</sup>焼そふだどふも素焼<sup>しらやき</sup>の匂ひがきらひだ。(人・春色梅児誉美・初・六)

しかし、近世前期における「さうな」には、伝聞の用法はまだ認めにくい。近世前期の『難波鉦』にも文脈上、伝聞の用法かと疑いたくなる例がないではないが、この時期には、「げな」にこそその用法が盛んだからである。(32)の第一例は、先に「げな」について調査を試みた近松の六作品中に、一例だけあつた終止連体形承接の「さうな」の例であるが、これも推定の用法である。

本居宣長の『古今集遠鏡』では、次のように助動詞「らし」を「さうな」と訳している。その訳語の用法も伝聞ならぬ推定である。

(33) たつた河もみぢ葉ながる神なびのみむろの山に時雨ふるらし(古今・秋下)

此川二紅葉ガナガレル 神ナビノ御室ノ山ニ時雨ガ  
シテ風ガフクサウナ

なお、次のように明治初期にも、まだ推定用法の例が稀には拾える。しかし、その頃を境に「さうだ」の推定の用法は衰退したと見てよからう。

(34) ライチよつとマア、おきてくんな。ハ、ア、宵はまち、夜中はこれが、あかつきの夢に見る気で、寐こんだそうだ。さらば、おこしてよろこばせやう。(仮名垣魯文・西洋道中膝栗毛・四下)

次に伝聞の用法の例を示す。伝聞の用法の出現は、宝暦(二七五)〜一七六一)ごろのことのようである。近世の例には、次のようなものがある。

(35) 「コレ瀬平様、味な事を言わんすが、何でわしが若御家に成ぞへ」……「……わしが若御家に成そふな。其様子が聞たい」(伎・幼稚子敵討・二つ目)  
・「唐の人はみな総髪か」「インヤ今は芥子坊主じやげな」「阿蘭陀人は坊主あたまだそふだ」(漸・鯛の味噌津)

・モシ鰯は必ずあがり升な。此間も噂をお聞なすつたか。鉄炮洲辺の餅屋がイヤわるさもわるい煤掃の日に食たさうだが、てきめん当つた。(滑・酩酊氣質・上)  
・今また他ではなしをきけば、榛沢六郎さまがそのまへ

からのおしらべで、唐琴屋の家の娘を内々でおたづねなされたそうだが、(人・春色梅児誉美・四・二四)

伝聞の用法は近世の末になるほど、次第にめだつようになつて、「げな」と交代する。明治初期のころから、終止連体形承接の「さうだ」は、次のような伝聞の用法だけになつて、その伝聞の表示性は明示的なものになるようである。明治期からは、丁寧形の「さうです」なども現れるので、併せて例を示す。

(36) 母親は私の四歳の時に私を置き去りに致しまして、越後の国へ往つてしまひましたさうです。(三遊亭円朝・牡丹燈籠・三)

・今日母の所から郵便が来たから読で見れば、私のかういふ身に成つたを心配して、此頃ぢや茶断して願掛けしてゐるさうだシ……(二葉亭四迷・浮雲・八下)  
・此の洞窟の中に、了海と云はるる御出家が、おはすさうじゃが、夫に相違ないか。(菊池寛・恩讐の彼方に・四)

活用語連体形承接の「さうな」については、推定の用法と伝聞の用法の出現時期にさほどの隔たりはなさそうであつた。しかし、室町期中ごろから認められた名詞に付く承接法(例(29)(30))なども、それに近い推定の用法と見れば、やはり推定の用法がかなり先行していることになる。「へ終

止なり」の場合も、「げなり√げな」の場合も、明らかに推定の用法が先行していた。「さうな√さうだ」についても、名詞に付く承接法をその推定の用法に含めて扱えば、相似た過程を経たことになってその推移が納得しやすくなる。「さうな√さうだ」の推定用法の発生は、その意味で室町中期ごろのことと見ておいてよいだろう。

なお、「さうだ」に伝聞の表示性が明示化するにつれて、その推定の用法に取って代わったのは、何よりも次のような「やうだ」であろう。

(37) お国さん誰か来たやうだよ。(三遊亭円朝・牡丹燈籠・五)

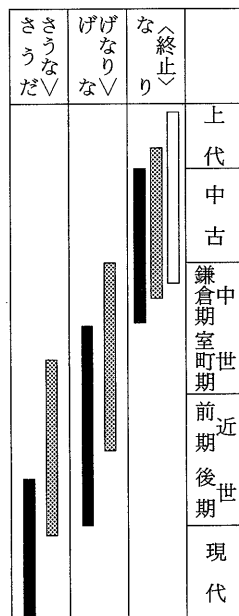
## 五 結び

「へ終止なり」「げなり√げな」「さうな√さうだ」という三種の助動詞のいずれにおいても、伝聞の用法は推定(状況推定)の用法の中に生じて共存するに至った。そのうちに、より古い推定の用法には、より新しい助動詞が形成され、それが古い形式に取って代わる。それに伴い、古い助動詞のほうには伝聞の用法が優勢化し、やがてそれしか認められなくなるという経過が認められた。その三種の助動詞に探ってきた、各用法の発生から衰退に至るおよその期間とそれらの相対的な時代差を図表に示せば、第三表

のようになる。

第三表 助動詞別の時代別・用法別分布

□ は音源推定、▨ は状況推定(推定)、■ は伝聞の各用法を示す。



伝聞の用法のみになった明治初期ごろ以降の終止形(通時的には終止連体形と呼んできた)に付く「さうだ」は、意味上、伝聞を明示する働きをそなえたが、「へ終止なり」も鎌倉中期以降、「げなり√げな」も、近世後期において、それぞれ用法が伝聞表示に偏り、それだけその時期における伝聞の表示性は明示的になっていったと考えてよいだろう。

三種の助動詞における伝聞の用法は推定の用法(「へ終止なり」では、音源推定と状況推定とがそれに当たる)に対して常に後発であった。この変遷の事実はどう解釈すべきであろうか。推定の用法は主体の類推によって多かれ少なかれ論理的に導かれた事柄を推定内容とするが、それ

に対して伝聞の用法は、第三者からあらかじめ入手した情報内容を即推定内容とする。しかしかと聞いている、だから、しかしかのようなように。そのしかしかのようなという後者の意味において伝聞も広義には推定であるが、しかしかと聞いていること自体は、むしろ推定の根拠となる事実の表示と見てよい。そういう根拠と推定内容との両面を同時にそなえることになる意味において、伝聞の用法は同じ助動詞の推定の用法よりも一般に根拠が明瞭になる可能性が高いだろう。

日本語では原因理由の表示法も、同じ形式においては時が経つにつれて明示化が進み、その結果、一方ではより非明示的な形式がそれに取って代わるという歴史を繰り返している。推定や伝聞の助動詞も、論理性の高さではそれに通じる点があるだろう。推定の助動詞にも、時が経つにつれて同様に論理の明示化が進むのだと考えれば、根拠と推定内容の一体化において論理のより明瞭な、伝聞の用法の相対的な後発性も、やがてその伝聞用法が優勢化すること、一応の説明がつくであろう。

論理の明示化は日本語では古来どちらかといえば嫌われがちであり、語の用法の発達史として見れば、明示化が老化につながるもの、その両者において共通するように思う。伝聞表示に関係する助動詞の場合も、既存の助動詞に論理

の明示化が進めば、より非明示的で、含みに富む穏やかな表示性の新しい形式が望まれ、形成されることになる。新しい形式は当然、根拠の表示性においてより含みのある推定の用法からそれに取って代わることになる。以上に見て来た三種の助動詞は、そのような変化を繰り返してきたと見てよいだろう。

### (注)

(1) 「き」「けり」の違いについての通説は、細江逸記『動詞時制の研究』（昭和七年、泰文堂）第四章の次のような説明に発する。

「き」は「目賭回想」で自分が親しく経験した事柄を語るものの、「けり」は「伝承回想」で他よりの伝聞を告げるに用ひられたものである。

次のように第三者から伝え聞いた事柄の表現に用いられている例を、いわゆる伝聞の用法として注意する立場もあるらしい（竹内美智子「助動詞（一）」『岩波講座日本語七文法Ⅱ』）が、その伝聞性もあくまで素材の区別にとどまると見るべきである。

今聞に、仲麻呂と同心して、竊朕を、掃と謀けり（家利）

### (二九詔)

(2) その点、たとえば時枝誠記『日本文法文語篇』（昭和二九年、岩波全書）の「けむ」、山崎良幸『古典語の文法』（昭和五八年、武蔵野書院）の「らむ」などには、いわゆる伝聞の用法も、素材的な区別に過ぎないことに触れた記述がある。

(3) 松尾捨治郎『国語法論攷』（昭和十一年）、同『助動詞の研

究」(昭和三六年、白帝社)、北原保雄「〈終止なり〉と〈連体なり〉——その分布と構造的意味——」(『国語と国文学』昭和四一年九月)などによる。

(4) (3)の松尾捨治郎『助動詞の研究』(昭和三六年、白帝社)。

(5) 春日和男「いはゆる伝聞・推定の助動詞「なり」の原形について」(『国語学』二三集、『存在詞に関する研究』(昭和四三年、風間書房)一八二頁)、北原保雄「へなり」と「見ゆ」——上代の用例に見えるいわゆる終止形承接の意味するもの——(『国語学』六一集)。

(6) (3)の松尾捨治郎『助動詞の研究』。

(7) 拙稿「推量体系の史的変容」(『国語学』一六五集)。

(8) 小松登美「助動詞めりの起源について」(『跡見学園紀要』二号、梅原恭則編『論集日本語研究 七助動詞』(昭和四四年、有精堂)に「見あり」が語源と考えられること、九世紀の用例には「視覚法の「めり」があること、「推量助動詞「めり」の出发点は、視覚事実にもとづく推量にあつたのではないか」などの指摘がある。しかし、「視覚法」の例の大半が和歌であることから「視覚法が推量法に先行したと考えるのは危険である」とも言う。

(9) 『日本国語大辞典』(小学館)は、助動詞「げな」を「活用語の終止形に付」くとし、『古語大辞典』(小学館)は、「活用語の連体形、形容詞の語幹、まれに体言に付」くとしている。

(10) 湯沢幸吉郎『徳川時代言語の研究』(昭和三八年、風間書房)には、近世前期の上方語の「げな」について、「そう思われる意にも、伝聞した意味にも用いる」とあるが、どちらが多いといった指摘はない。

(11) 近世後期における伝聞への偏りについては、富士谷成章『あ

ゆひ抄』の次の指摘(傍線筆者)も参考になる。

里に「げな」といふ詞は(中略)ふるく「何げなる」といへりける詞よりいで、二三百年のまへまでは、すぐに「めり」といふ詞にあつべく用たりけるを、このごろはたゞきつたえたることにかぎりて、歌によまば「てふとなん」などいふことにあつべきやうになりたれば、なか／＼まぎらはしくやとて、今はあてず。

(12) 語幹が一首節の形容詞には、ごく初期を除き、間に「さ」を入れることが多くなる。

(13) (10)の『徳川時代言語の研究』には、近世前期の上方語の終止連体形に付く「さうな」について、「推量の意を表し、現代語の「らしい」「様だ」に当る」としか述べていないが、仙波光明「終止連体形接続の「げな」「さうな」——伝聞用法の発生から定着まで——」(『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』昭五一・一二、表現社)は、『幼稚子敵討』(宝暦三年)の例を最古と見ている。筆者にもそれ以上は遡れそうにないので、伝聞の用法の成立は仙波説に従い、宝暦ごろと見ておきたい。

(14) 拙著『日本語接続法史論』(平成八年、和泉書院)第十一章。

